セルジュ・ポーガム
ブリュノ・クザン
カミーラ・ジオルジェッチ
ジュール・ノデ
◉著

川野英二／中條健志
◉訳

貧困へのまなざし

富裕層は貧困層をどのように見ているのか

Serge Paugam, Bruno Cousin, Camila Giorgetti, Jules Naudet
Ce que les riches pensent des pauvres

新泉社

訳者あとがき

本書は、Serge Paugam, Bruno Cousin, Camila Giorgetti, Jules Naudet, *Ce que les riches pensent des pauvres*, Paris, Éditions du Seuil, 2017 の全訳である。フランス語の原題を直訳すると『富裕層は貧困層をどのように考えているのか』であるが、邦訳の刊行にあたっては、本書の内容を日本語読者により理解しやすいものと考え、『貧困へのまなざし――富裕層は貧困層をどのように見ているのか』として、原題に寄せた邦題をつけた。

筆者の一人セルジュ・ポーガムは、フランス社会科学高等研究院教授で、モーリス・アルブヴァックス・センターで所長も務めてきた。ポーガムは欧州における貧困・社会的排除の研究を代表する一人だが、彼の研究の特徴はそれにとどまらず、エミール・デュルケム以来のフランス社会学の伝統を継承しながら、社会学の古典を再読しつつ実証的な研究にもとづいて現代社会の社会的紐帯のあり方を考察する点にあるだろう。彼の主著の一つといえる『貧困の基本形態――社会的紐帯の社会学』は、二〇一六年に日本語訳として出版されており、幸いにも日本の多くの分野で受け入れられてきた。

ポーガムの研究の対象がたんに「貧困層」のみに向けられているわけではないことは、本書をひもとけば理解できるだろう。本書の主要な関心は、タイトルに端的にあらわされているとおり、富裕層

を対象に貧困をどのように考えているのか、つまり本書の表現で言うと、富裕層による「貧困の知覚」である。「知覚」と訳すと直感的にはややこなれない訳のように思えるかもしれないが、この表現はもともと社会心理学の「社会的知覚」研究にもとづいており、欧州では一九七〇年代からユーロバロメーターなどの「貧困観」に関する調査において、貧困の原因帰属に関する質問項目として用いられてきた。貧困の原因帰属とは、本書でも分析結果が一部紹介されているが、貧困の原因を「社会の不公正」「社会的に不可避」「個人の怠慢」「個人的な不運」のいずれに帰するかを問うものである。この貧困知覚の指標は、国際比較調査で用いられ、個人の社会経済的地位や他の意識変数との関連を検討したりなど、計量社会学的な研究でも使用されてきた。

ポーガムらもユーロバロメーター調査にメンバーとして加わった際に、貧困観の国際比較をおこなってきた。その結果は前訳書『貧困の基本形態』でも検討されており、そこからポーガムは、「統合された貧困」「マージナルな貧困」「降格する貧困」という三つのタイプの貧困類型を提案している。こうした研究にもとづいて、ポーガムはエスピン＝アンデルセンの福祉レジーム論を参考に、「アタッチメント・レジーム」の類型を提起するようになった。それが「家族主義」「ヴォランタリスト」「有機主義」「普遍主義」の四つのレジームである。これらのレジームは社会的紐帯のタイプや貧困の原因帰属のあり方とも関連しており、ポーガムの国際比較研究の分析枠組みとなっている。

このレジーム比較は、ポーガムのおもな理論的な関心である「社会的紐帯」のあり方、つまり親族の紐帯、選択的参加の紐帯、有機的参加の紐帯、シチズンシップの紐帯の編み合わせとナショナルなレベルでのその相対的な優先度によってレジームが異なり、それが貧困や社会的排除のあり方にまで影響を及ぼすという考え方をもとに展開されている。ポーガムは最新著『社会的アタッチメント』

（二〇二三年、未邦訳）で、このアタッチメント・レジーム論にもとづいて、日本を含めた国際的な比較社会学を展開している。

本書『貧困へのまなざし――富裕層は貧困層をどのように見ているのか』はこの分析枠組みにもとづいているが、ポーガムのアタッチメント・レジームによれば、本書で対象となっている三つの国のうち、フランスは「有機主義レジーム」、インドとブラジルは「家族主義レジーム」に属している。ちなみに日本も家族主義レジームに属するが、「政治的家族主義」という特徴をもつとされている。これらのレジームが富裕層による貧困知覚、つまり貧困へのまなざしに影響を与えているというのが本書の主張である。

本書は、ポーガムの他に三名の共著者との共同研究の成果でもある。とくにフランス・パリの富裕地区ではブリュノ・クザン、インド・デリーではジュール・ノデ、ブラジル・サンパウロではカミーラ・ジオルジェッチが分担して調査と分析をおこなっている。ブリュノ・クザンは都市社会学が専門で、パリやミラノのジェントリフィケーション地区での調査をおこなってきた。ジュール・ノデはフランスやインドのエリートに関する国際比較研究で博士論文と著書を発表している。カミーラ・ジオルジェッチはブラジルの大都市の衛生問題を研究し、ブラジル・サンパウロ版ＳＩＲＳ（健康、不平等、社会的断絶）調査を実施している。本書での調査方法については本文で解説されているのでここではくわしくは触れないが、各国の主要都市のセグリゲーション（居住分断）の状況を分析したうえで、特徴的な富裕地区をそれぞれの都市から四地点選び、これらの地区に在住する富裕層、エリート層にコンタクトをとって、詳細なインタヴュー調査を実施している。

本書では、富裕層にたいするインタヴューの分析の際には、富裕層が貧困を語るときの「レパートリー」や「レジスター」を抽出して、かれらがいかにして貧困層にたいする道徳的・社会的境界を構築し、自らの地位を擁護し正当化しているのかを検討している。「レパートリー」という概念は、日本の社会学ではあまりなじみのない用語であるが、アメリカではチャールズ・ティリーの社会運動研究やミシェル・ラモンの「文化社会学」、フランスではリュック・ボルタンスキーやロラン・テヴノらの「プラグマティック社会学」など、九〇年代以降の社会学の新しい潮流のなかで用いられるようになっている。本書では、富裕層が貧困を語る際に、利用可能な言語資源であるレパートリーをもとに、場面に応じた言葉遣い（「レジスター」）を使って、かれらが貧困層にたいしていかにして道徳的・社会的境界を構築しながら自らの地位を正当化しているのかが分析されている。

ほかに一般になじみのない用語の一つとしては、「閉鎖」という言葉がある。原語は entre-soi で、「内輪」と訳されることもあるが、富裕層・エリート層、あるいは都市セグリゲーションの研究でよく使われる言葉で、「同類結合 homophily」、つまり似たもの同士の集まりを意味する。社会学ではマックス・ウェーバーに源流をもつ「社会的閉鎖」概念がよく知られており、entre-soi は英語で social closure と訳されることがあるため、本書では一貫して「閉鎖」と訳している。エリート層、富裕層は、露骨に他の階層を「排除」するわけではないにしても、富裕層の居住選択やかれらのあいだの閉鎖的なサークルが、階層格差の空間的な表現である大都市のセグリゲーションへとつながるのである。

本書ではまた、著名な政治学者で人類学者でもあるジェームズ・C・スコットの「隠れたトランスクリプト」という用語が出てくるが、これも耳慣れないものかもしれない。「隠れたトランスクリプ

ト」は、表向きで語られる「公的なトランスクリプト」にたいして、いわば舞台裏の語りである。スコットは隠れたトランスクリプトを従属階級による抵抗の様式として分析するが、本書で扱われるような支配層においては、同じ層の人たちが集まる社交クラブや友人同士、家庭のなかなど、より閉鎖的な空間のなかで語られるものである。ピエール・ブルデューが『世界の悲惨』でインタヴューする側と話す側の社会空間上の位置の類似性を強調したように、本書が対象とする富裕層についても、より話者と近い立場のインタヴュアーを立てて、かれらができるだけ心を開いて話ができる状況をつくるという方法を用いることによって、表では聞くことの難しい「隠れたトランスクリプト」の一端が明らかにされている。

近年、北米や欧州では「エリート研究」にふたたび注目が集まっている。その背景には、トマ・ピケティの『二一世紀の資本』(みすず書房、二〇一四年)が爆発的な売れ行きを見せたように、世界的な格差の増大傾向があるといわれるが、社会学で現在盛んとなっているエリート研究でしばしば参照されるのが、ブルデューに大きな影響を受けたミシェル・パンソンとモニク・パンソン＝シャルロの都市富裕層の研究である。かれらは、日本語訳のあるバンド・デシネ『リッチな人々』(花伝社、二〇二〇年)に登場する社会学者夫妻である。ミシェルは二〇二二年に亡くなったものの、フランスでは頻繁にメディアに登場するなど、一般にもよく知られた社会学者でもある。

この夫妻は、長期にわたる富裕層にたいするインタヴュー調査にもとづき、都市セグリゲーションを生み出す要因として富裕層の閉鎖と自己防衛のメカニズムがあると主張している。一般に、社会学者のとくにフィールド調査は貧困層やマイノリティに偏りがちで、エリート層ないし富裕層にたいす

る調査は困難であると考えられてきたが、パンソン夫妻の調査はそうした社会調査の難しさを克服してエリート研究に新しい道を切りひらいた先駆として位置づけられている。パンソン夫妻には富裕層を調査する際の方法論的な著作もあり、その後フランスでは、オリビエ・ゴドショーの金融トレーダーのネットワーク分析、フレデリック・ルバロンの中央銀行幹部に関する多重対応分析を用いた社会空間の分析など、エリート層にたいする研究の蓄積も増えている。

こうしたエリート研究の活性化はまた、イギリスではジョン・スコットやマイク・サベッジの階級研究、アメリカではシャムス・カーンのエリート学校のフィールドワークなど、数多くの成果を生み出している。ここ数年をみても、社会学の専門雑誌でエリート研究の特集が組まれるようになっており、とくにクザンやノデはこうした国際的な研究をリードする研究者となっている。その点で本書は、これまでのポーガムの貧困の社会学に加えて、パンソン夫妻らの都市セグリゲーションと富裕層の研究、近年のエリート研究の潮流に位置づけられるものであり、理論的・方法論的にも、九〇年代以降のアメリカの文化社会学やフランスのプラグマティック社会学以降の研究をとりいれた野心的な研究プロジェクトの成果であるといえるだろう。ここで紹介した海外の社会学の潮流は、まだ日本の社会学で十分に吸収されているとはいえない。本書は、都市社会学やエリート研究、貧困研究をクロスオーバーする研究ではあるが、それだけではなく、質的研究を志す研究者にとっては近年の社会学の動向をとりいれた経験的研究の成果として一つのお手本ともなるのではないかと思う。一方で、インタヴュー調査による富裕層の赤裸々な本音、つまり「隠れたトランスクリプト」が語られている部分はとくに、社会学を専門としない一般の読者にとっても大きな関心を引くのではないかと思われる。

本書の翻訳は、序章、第一章、第五章、第六章、終章、方法論上の補遺、謝辞を川野が、第二章、第三章、第四章を中條が担当し、相互に訳文の検討をおこなったが、訳語については日常的な語彙は中條、専門的な用語は川野が調整した。

原著の出版は二〇一七年で、三つの国の政治状況はその後変化したものの、本訳書の刊行にあたって加筆・修正等はおこなわなかった。一瞥していただければわかるとおり、本書は三か国の大都市の具体的な地域をフィールドとした調査報告である。理論書であれば抽象的なタームで済むかもしれないが、こうしたタイプの本を訳すためには現地の具体的な知識も必要とする。訳者は二人ともフランス・パリについてはある程度は理解しているつもりであるが、インドやブラジルにかんしていえば、短期間訪問した程度のまったくの素人である。そのため、訳者の気づかない誤読や誤訳が多くあるのではないかと恐れる。

本書はフランス語で書かれたものだが、固有名詞の訳出にあたっては、各国の言語を基準にカタカナとして表記した。その際、現地の人名・地名・固有名詞については、ブラジルは小貫大輔氏（東海大学）、インドは佐藤裕氏（都留文科大学）、フランス語の俗語・口語表現についてはドナシメント・アントニー氏（東海大学）にチェックをいただいた。三氏の助力のおかげで、少しでも正確な訳出に近づくことができたのではないかと思う。しかし、訳者の力量では及ばない誤訳や誤解があれば、それは訳者の非力によるものである。

なお、原著では本文の最後にインタヴュー対象者の属性や具体的な職業名などのリストが付けられており、かなりのページ数を占めていたが、とくに本文の理解に支障はないと判断したため、割愛した。また、この訳者あとがきについても、フランス語訳した草稿を本書の著者たちに確認してもらっ

た。詳細なコメントをくれたブリュノ・クザン氏に記して感謝したい。

最後に、いつもながら新泉社の安喜健人氏にはたいへんお世話になった。ポーガムの前著とくらべて具体的な固有名詞や地名、文脈の理解が必要な箇所が多く、また複数の著者による執筆のためか文体に揺れもあり、予想以上に翻訳に時間がかかってしまった。丁寧にゲラを読んでチェックしていただいたおかげで、少しでも読みやすいものになったとしたら、安喜氏ほか新泉社編集部のみなさんのおかげである。

二〇二四年一一月

訳者を代表して　川野英二